

18 - 19 世紀の飢饉・短期経済変動と二本松藩の人口

Famine, short-term stress, and population in 18-19th century northeastern Japan

黒須 里美 (麗澤大学)

Satomi Kurosu (Reitaku University)

skurosu@reitaku-u.ac.jp

本研究は近世東北日本の人別改帳をベースとした約 150 年継続する多世代パネルデータ (Xavier Data) を活用し、飢饉・災害や経済変動など外的要因が庶民の人口行動に与える影響を探る試みである。飢饉年と平常年における死亡・移動パターンの比較、町場と農村の比較を中心として、二本松藩がうけた天明、天保の大飢饉の影響を死亡と移動の記述的分析から迫り、さらに Eurasia Project Model を応用した飢饉の影響と短期経済的ストレス (米価) が男女のライフコースにおける死亡リスクに与える影響を多変量解析から探る。

危機(crisis)への人口学的レスポンスの研究は、従来賃金や食物価格の変動などを含む外的要因の影響としてのタイムシリーズ分析、または大きな危機があった後にその影響を見る探索的分析が多かった。K. Davis のいう危機に対する死亡、出生、移動を含む様々な人口学的行動 (“Multiphasic Response”) の実証的分析は始まったばかりといえよう。その方法には Eurasia Project モデルが応用できる。Eurasia Project は 18-19 世紀 5 ヶ国 7 地域(スウェーデン、ベルギー、イタリア、中国、日本)の国際比較研究である。これまでの歴史人口学研究になかった個人のライフコースと世帯経済や同居情報を照合させることで、イベント(死亡・出生・結婚)生起の要因として、村落・コミュニティの短期経済的ストレスや世帯の社会経済的地位・同居人・配偶者の影響を探る分析を可能にした(Eurasian Population and Family History, MIT Press)。さらに IUSSP セミナー “Demographic Responses to Economic and Environmental Crises” (Kurosu et al. 2010) では、Eurasia Project Model を応用し、経済的な変動の影響と死亡危機の影響を融合した新しい試みなどがなされた(Tsuya and Kurosu 2010)。

本研究はデータを拡張して Eurasia Project Model を応用する。利用するデータは、陸奥国安積・安達郡(二本松藩、現在の福島県郡山市周辺)の人別改帳をベースとした多世代パネルデータ(Xavier Data 麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト所蔵)の内、4 町村である。

下守屋村	1716-1869 年	(145 年・欠年 9 年)	50,197 人年
仁井田村	1720-1870 年	(146 年・欠年 4 年)	68,682 人年
日出山村	1708-1871 年	(123 年・欠年 36 年)	38,661 人年
郡山上町	1729-1870 年	(132 年・欠年 20 年)	202,726 人年

このうち 3 つは農村であるが、その大きさや街道への近さなどから稲作以外の養蚕業や経済の発展具合にも違いがある。下守屋村は山沿いの農村、仁井田村は郡山と本宮間の街道沿いの農村、日出山村は郡山町から 3km ほどの村である。郡山上町は在郷町で、支配上は農村に立地しながら都市的要素をもつ宿場町として繁栄し、旅籠屋・造酒屋・太物屋・質屋などの商売も盛んで、幕末には養蚕・製糸業も発達周辺村落の経済的中心地である。

人口の推移でみると、郡山上町は町場に昇格した 1824 年前から人口は常に上昇しているが、下守屋・仁井田村は天明の飢饉前後から激減し始めた人口が回復するのは、天保の

飢饉以降(1840年以降)という違いがある。データとしては、人別改帳の形態は同じで、性別、年齢、続柄イベント(出生・死亡・結婚他)、移動理由、移動先/元、世帯持高・土地賃借などの情報もある。不明による個人記録の終了は全体の0.3-2.2%のみであり、国際的にみても良質かつ詳細なデータとされる(Dong et al. 2015)。

分析では、まず<1>記述分析として、(1)天明の飢饉を1782-87年、天保の飢饉を1833-35年(前半)と1836-38年(後半)として平常年との比較から町村別死亡率と移出率と逃散率を算出する。飢饉年を何年とするかには様々な見解があるが、本研究は「奥州二本松年表」(菅野2004)、二本松藩史、郡山市史の記述に依拠する。さらに天保の飢饉のあとに伝染病による死者が続出したという研究(速水1982)と二本松年表の記述から、凶作・飢饉の続いた前半と、疫病が流行した後半にわけて分析を試みる。また、(2)天明、天保の飢饉とその前後の年を含めた町村別の年別死亡数と移出数と逃散数を算出する。さらに(3)死亡については、8割ほど記載のある死亡月の情報から死亡の季節性を、(4)移動については、地理情報から平常年と飢饉時の移動先の違いを比較する。これらの記述的分析から、平常年と飢饉年で、同じ二本松藩であっても町村による違いがあるが、特に死亡・移出・逃散が集中する年や月が判明する。また、年別普通死亡率は飢饉年以外にもスパイクが多く、短期経済変動の指標である会津米価との関係はシンプルではなく、他の外的要因を探る必要性があることも示唆される。

そこで、次に<2>死亡に焦点をあて、イベントヒストリー分析から、郡山上町と下守屋・仁井田村それぞれの人口について、飢饉年とそれをコントロールした上で短期経済変動の影響を探ったのが以下の表である。飢饉と短期経済的ストレスが死亡リスクへ与える影響は町村、また男女のライフコースのステージによって異なる。町場の成人男女は天保期前半・後半ともに、平常年より死亡リスクが1.5-1.8倍になる。子ども(男女)は天保期後半に、高齢者(男性)は天保期前半に死亡リスクが高まり、後半は伝染病による影響が示唆される。

郡山上町	1-14歳		15-54歳		55-74歳	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
飢饉(ref.平常年)	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
天明	0.845	0.648	1.097	1.412 #	0.913	1.108
天保前半	0.909	0.911	1.733 **	1.458 *	1.558 *	1.392
天保後半	2.257 **	2.203 **	1.832 **	1.479 *	1.176	1.610 *
短期経済的ストレス						
米価	0.861	0.816	1.594 **	1.052	1.599 **	1.521 *

下守屋・仁井田村	1-14歳		15-54歳		55-74歳	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
飢饉(ref.平常年)	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
天明	0.645	1.146	1.536	1.385	2.137 **	1.902 **
天保前半	0.652	0.796	1.582	0.656	1.934 *	1.125
天保後半	1.483	2.972 **	1.228	0.946	1.412	1.256
短期経済的ストレス						
米価	1.016	1.217	1.393	0.656	1.392 #	1.211

p<0.1; * p<0.05; **p<0.01 コントロール変数：年齢、世帯の持高、世帯規模、村、年代